資料３

個体数管理のあり方などについて

【検討資料】

令和６年３月２５日

現状認識の一例

		問題個体数が（あつれきが）	
		少ない	多い
個体数が	少ない	①　不適切な関係を戒め続け、キムンカムィを守る	②　被害が続き絶命も危惧される・人間活動規制
	多い	③　最も望ましい状態	④　ウェンカムィを駆除、早急に変心率低下措置を

現状

参考引用）松田：応用生態工学研究会公開講座（九大工），2001年8月25日

- 個体管理により③を目指してきたが、**現状は④**。
- **個体数管理**により①。
- **②に陥らぬよう**防除等の併用は不可欠。

生息数に応じた考え方の例

現計画

絶滅回避の管理

許容下限水準
個体群存続に必要な個体数
（２００頭）

予防水準
絶滅のおそれを予防する個体数
（４００頭）

絶滅確率を５％以下とする メスの捕獲上限を設けて管理

【表5　地域別メス捕獲上限】

地域名	R2 個体数 中央値	計画期間 総メス捕獲 上限数	【参考】 H28～R2 間 年平均メス 捕獲数（実績）
①渡島半島	1,840	500	58
②積丹・恵庭	760	60	7
③天塩・増毛	850	60	5
④道東・宗谷	3,980	875	121
a　西部	2,330	600	88
b　東部	1,650	275	33
⑤日高・夕張	4,260	825	65

減　　増

計画の充実

整合について検討が必要

あつれきが社会問題になっていなかった頃の個体数水準を設定

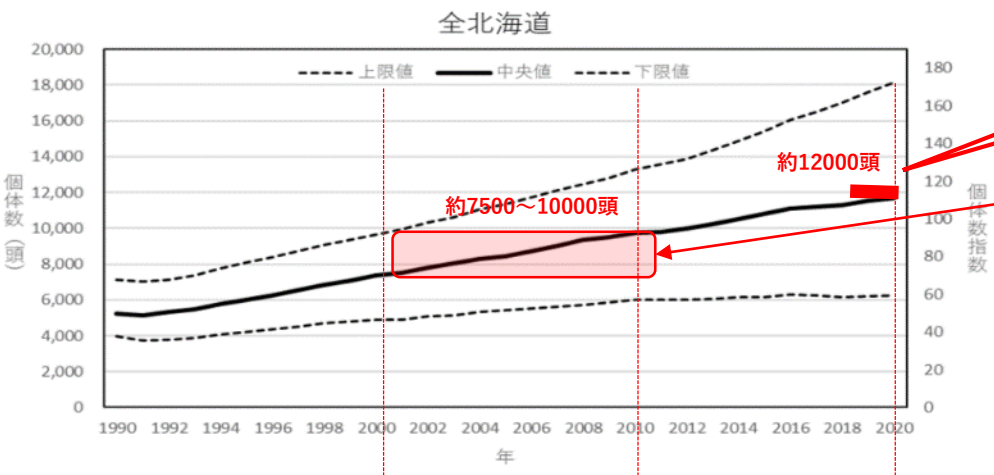
増加を止める

第２段階　←　第１段階

あつれき低減の管理

（一案）
あつれきを低減することを目的に、目撃通報件数、農業被害額が現状よりも少なく、社会問題化していなかった時期として、２００１～２０１０年頃、若しくは１９９６～２０００年頃の生息数を目安としてはどうか？

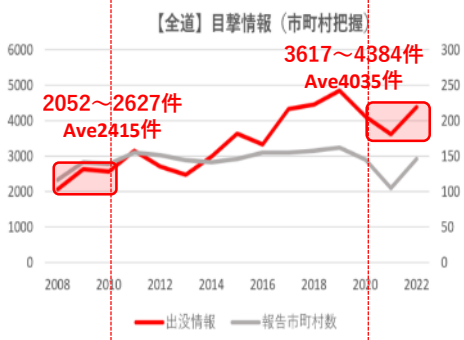
捕獲目標設定の考え方の例



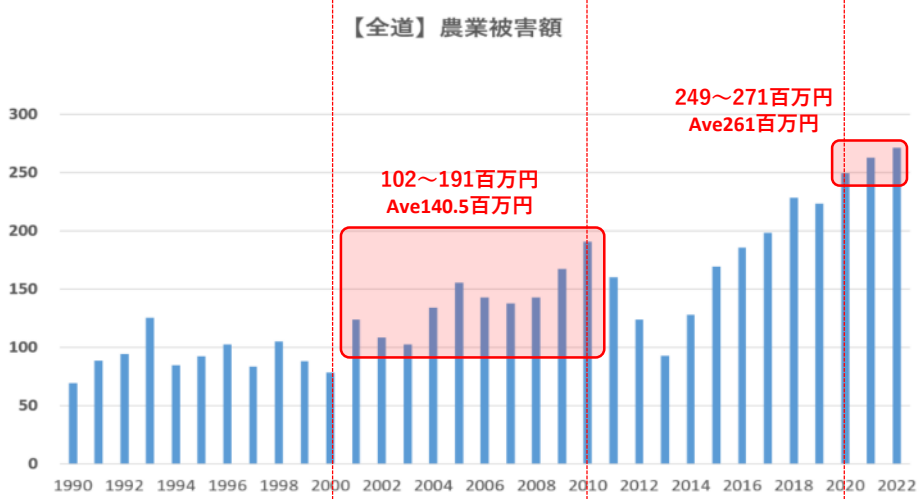
第１段階
増加を止める

第２段階
2001～2010年当時の
推定個体数

2022年　　：約12,070頭（100%）
2001～10年：約8750頭（**72.5%**）

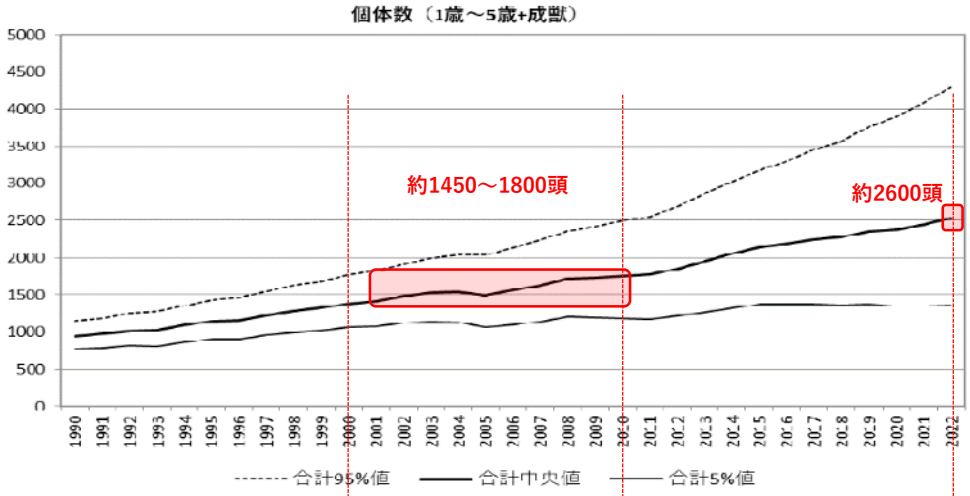


2020～22年：4035件（100%）
2008～10年：2415件（**59.9%**）

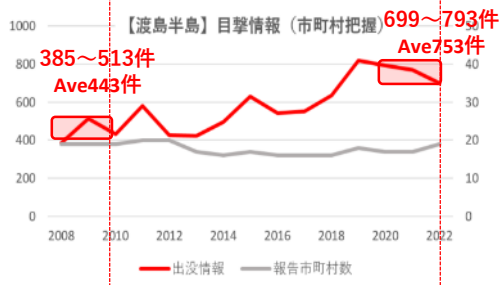


2020～22年：261百万円（100%）
2001～10年：141百万円（**54%**）

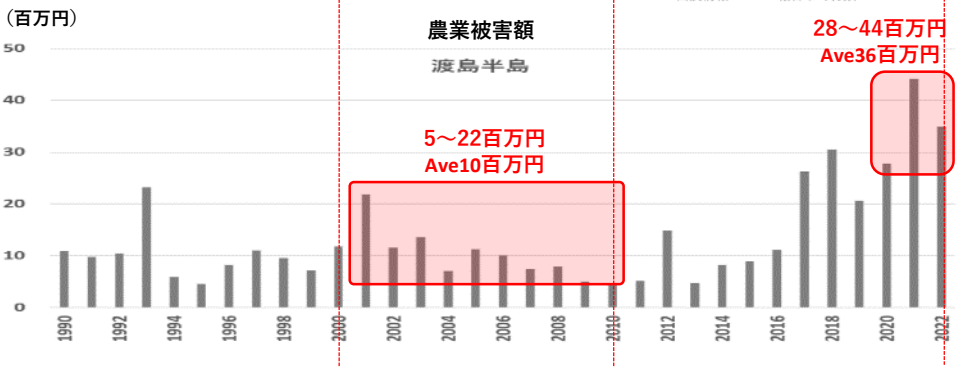
渡島半島（捕獲目標設定の考え方の例）



2022年　　：約2600頭（100%）
2001～10年：約1600頭（**約62%**）

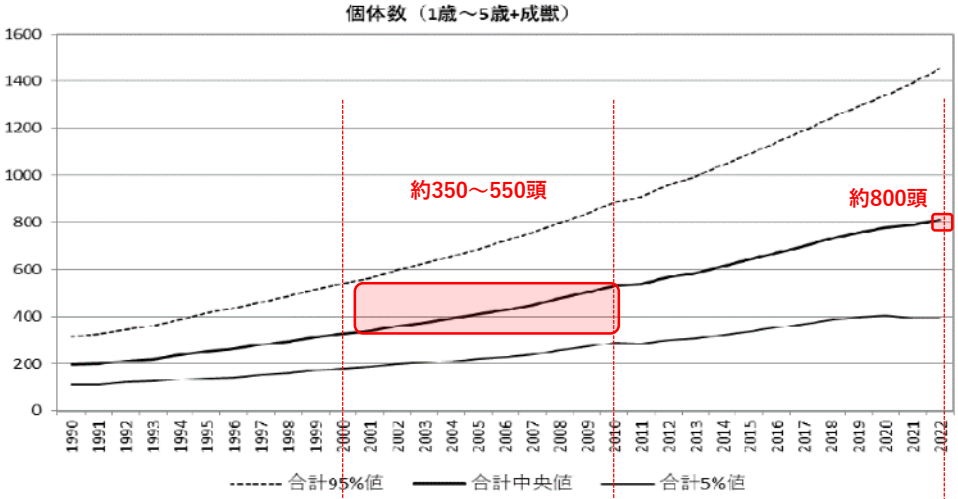


2020～22年：753件（100%）
2008～10年：443件（**58.8%**）

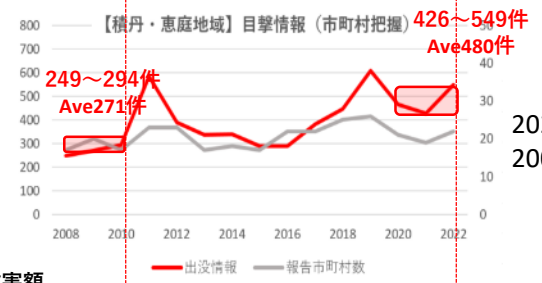


2020～22年：36百万円（100%）
2001～10年：10百万円（**27.7%**）

積丹・恵庭（捕獲目標設定の考え方の例）



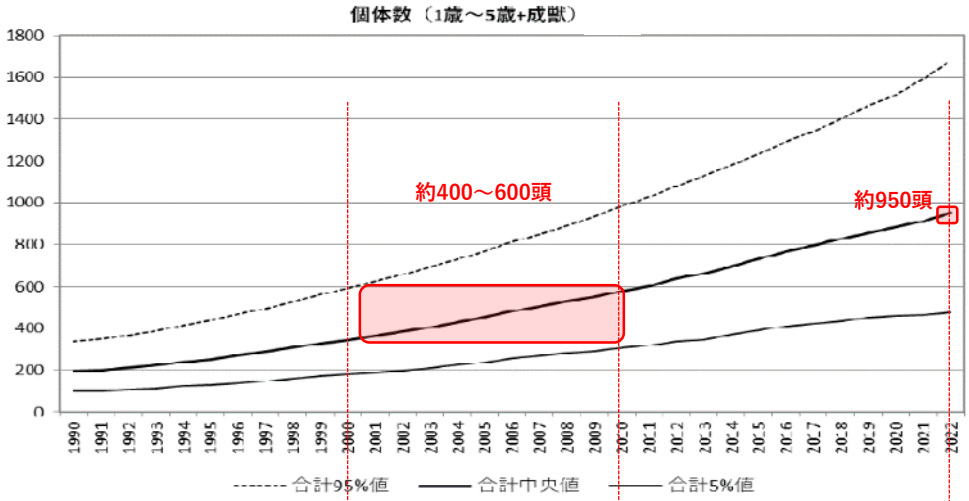
2022年　　：約820頭（100%）
2001～10年：約450頭（**約55%**）



2020～22年：480件（100%）
2008～10年：271件（**56.5%**）

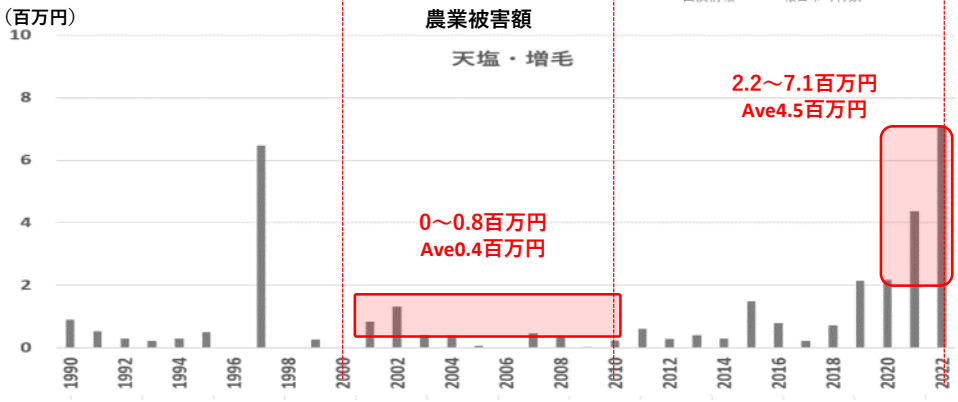
2020～22年：4.3百万円（100%）
2001～10年：3.6百万円（**83.7%**）

天塩・増毛（捕獲目標設定の考え方の例）



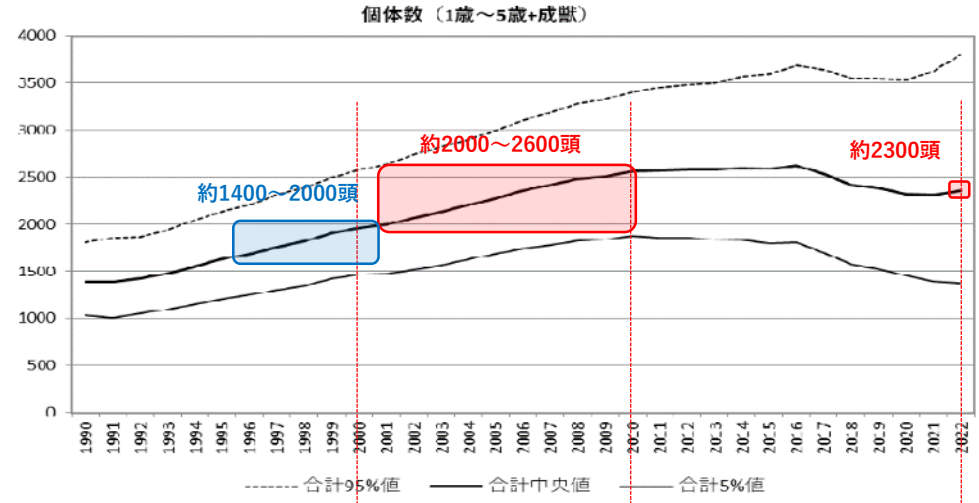
2022年　　：約910頭（100%）
2001～10年：約500頭（**約55%**）

2020～22年：241件（100%）
2008～10年：69件（**28.6%**）

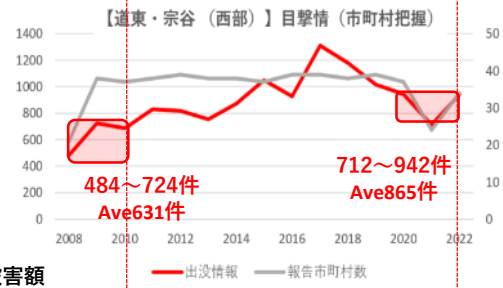


2020～22年：4.5百万円（100%）
2001～10年：0.4百万円（**8.9%**）

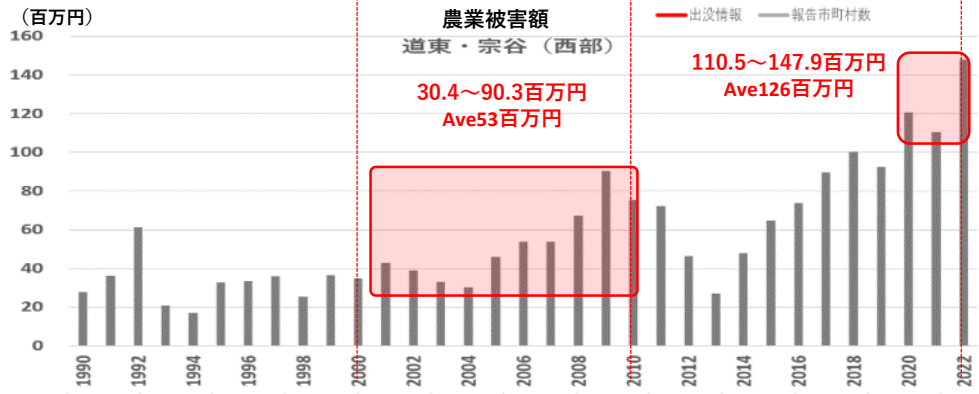
道東・宗谷（西部）（捕獲目標設定の考え方の例）



2022年　　：約2200頭（100%）
2001～10年：約2300頭（**約105%**）
1996～00年：約1700頭（**77%**）

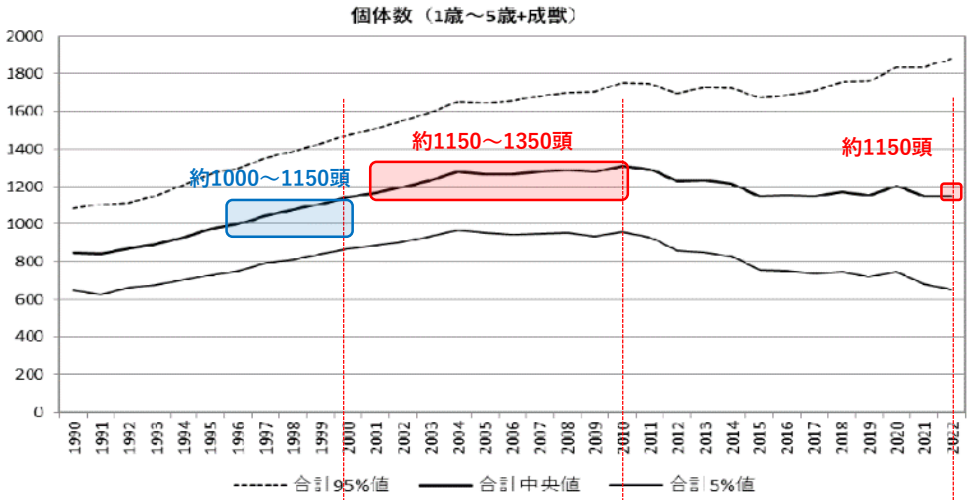


2020～22年：865件（100%）
2008～10年：631件（**72.9%**）

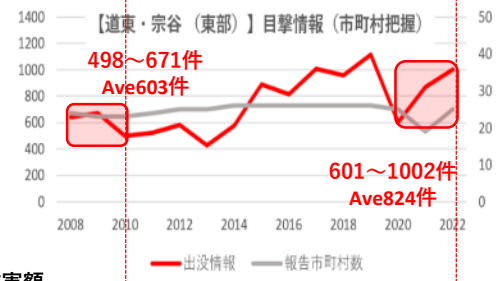


2020～22年：126百万円（100%）
2001～10年：53百万円（**42.0%**）

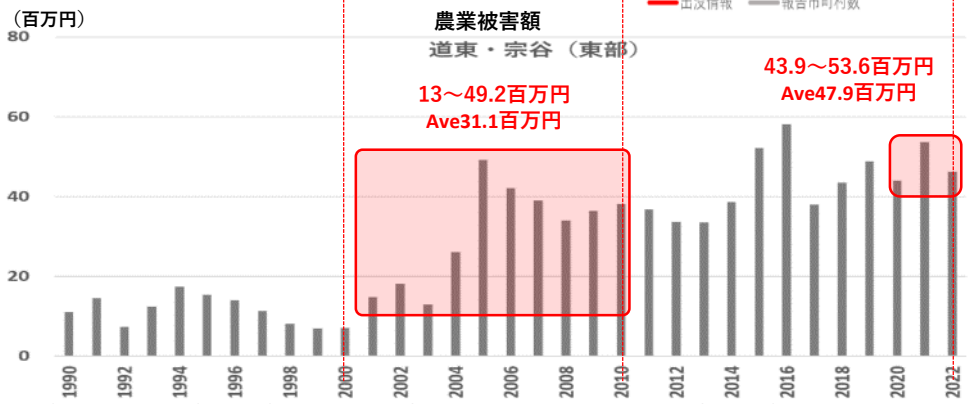
道東・宗谷（東部）（捕獲目標設定の考え方の例）



2022年　　：約1140頭（100%）
2001～10年：約1250頭（**約110%**）
1996～00年：約1075頭（**約94%**）

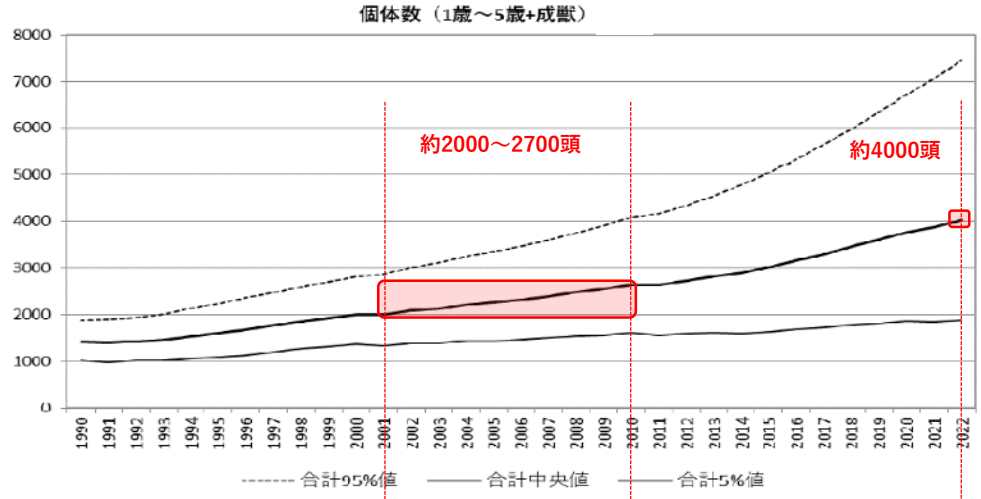


2020～22年：824件（100%）
2008～10年：603件（**73.2%**）

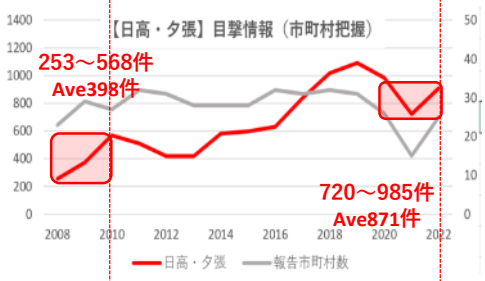


2020～22年：47.9百万円（100%）
2001～10年：31.1百万円（**64.9%**）

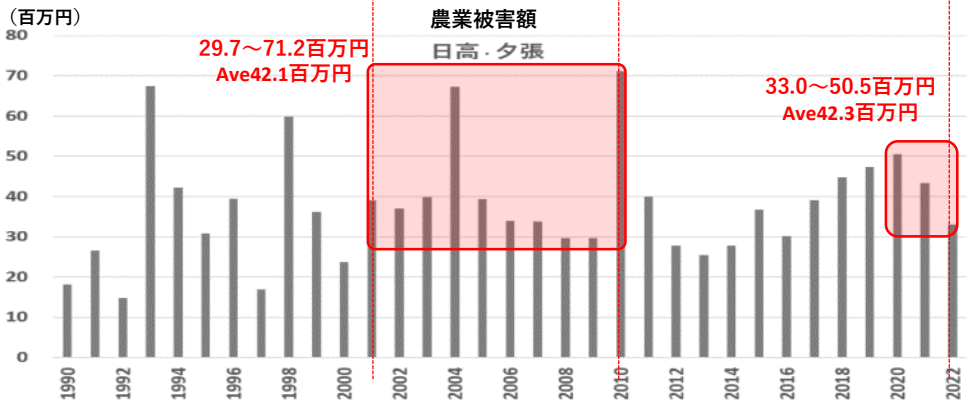
日高・夕張（捕獲目標設定の考え方の例）



2022年　　：約4000頭（100%）
2001～10年：約2350頭（**58.8%**）

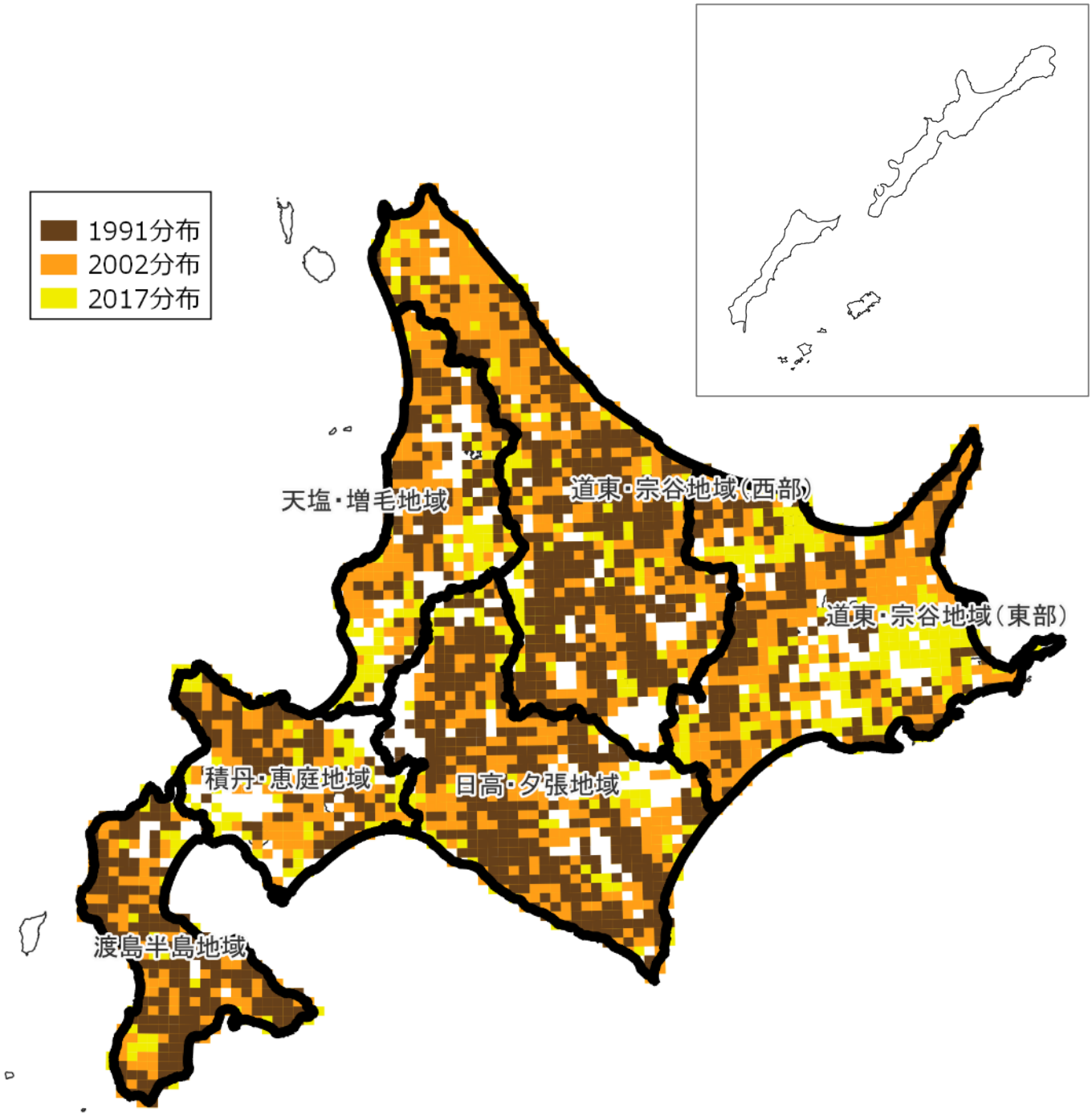


2020～22年：871件（100%）
2008～10年：398件（**45.7%**）



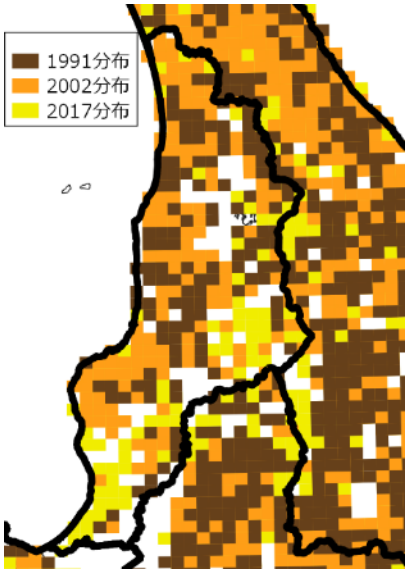
2020～22年：42.3百万円（100%）
2001～10年：42.1百万円（**99.5%**）

（参考）ヒグマの分布域の推移



自然環境保全基礎調査（第５～７回）GISデータ(環境省生物多様性センター)を加工して作成

天塩・増毛地域



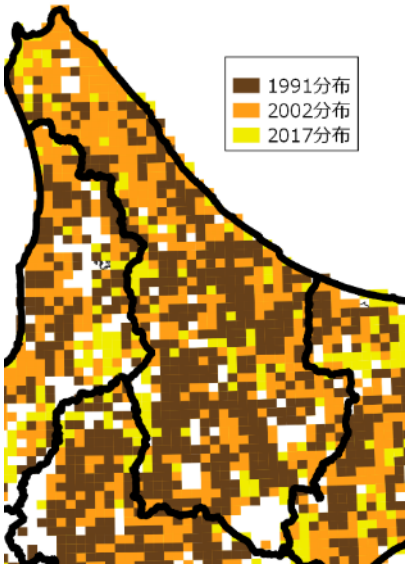
メッシュ増加率

×1.8　×1.4

1991年（H3）▶2002年（H14）▶2017年（H29）

×2.5

道東・宗谷地域（西部）



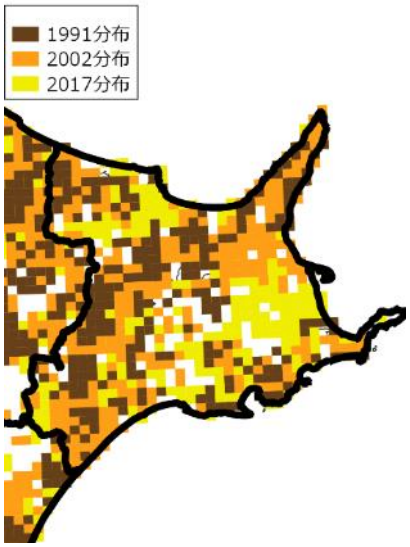
メッシュ増加率

×1.6　×1.2

1991年（H3）▶2002年（H14）▶2017年（H29）

×2.0

道東・宗谷地域（東部）

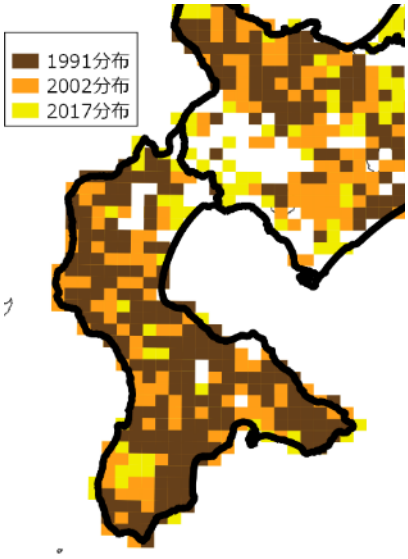


メッシュ増加率

×1.9　×1.5

1991年（H3）▶2002年（H14）▶2017年（H29）

×2.9



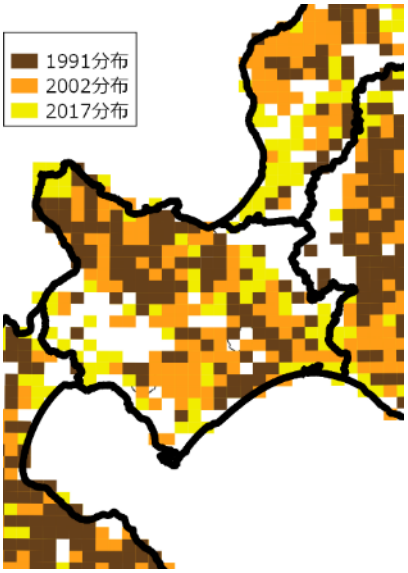
メッシュ増加率

×1.3　×1.2

1991年（H3）▶2002年（H14）▶2017年（H29）

×1.6

渡島半島地域



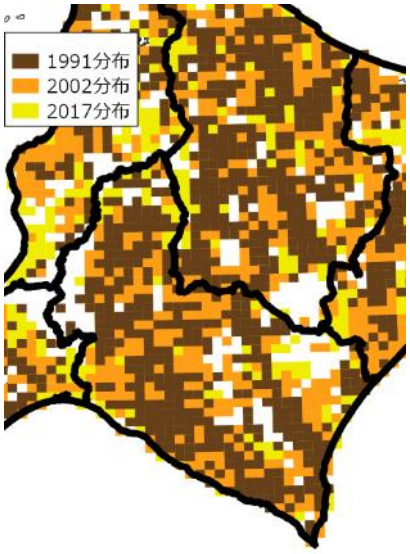
メッシュ増加率

×1.7　×1.4

1991年（H3）▶2002年（H14）▶2017年（H29）

×2.4

積丹・恵庭地域



メッシュ増加率

×1.4　×1.2

1991年（H3）▶2002年（H14）▶2017年（H29）

×1.7

日高・夕張地域

＜参考：前回検討会主な意見概要（個体数のあり方など）＞

〈捕獲目標〉

・計画に、捕獲上限数はあるが目標の設定はない。増加傾向にある中でどうするか。
・模式図は、便宜的に2014年を100としているが、これを目指すのかどうか議論はしていない。
個体数水準やあつれき指標をどうするのか議論の上、今後の方針を考える必要。
・個体数の水準をどこにするかが決まると捕獲目標が決まるのではないか。
・どれぐらいの水準にするのかを決めて、数字を検討すべき。
・個体数精度は高くはないが、管理はやりながら見いだしていくということが一つ。減少トレンドが含まれず増加している状態での推定は難しい。
個体群の動態把握できるかを見る上でも、捕獲目標の設定は必要だと思う。それは試行的にここまで減らすという目標設定でもよいと思う。
・検討会で、捕獲目標を提案して、どうするかは道が決める流れがいいのでは。
・現計画にある捕獲上限から考えてはどうか。
・予防水準に近づける観点で捕獲数を設定し、機械的に計算できるのではないか。
・水準を予防水準まで下げてもよいが、許容加減までは下げないことは必要。
・捕獲目標は地域別に設定すべき。
・予防水準に向けて捕獲目標数を設定していく考え方を共有したい。
・捕獲上限に対し捕獲実態は少ない。その達成度は地域個体群によって異なり、達成度が十分であってもあつれきは増えている感じもする。それぞれの数字を設定する必要。
・捕獲目標は、地域個体群ごとに、あつれき状況を見ながら、予防水準まで行ける無理のない範囲で、目標達成可能な基準をつくることとし、具体的な数字を検討していく。
・達成できない数値目標はよくないが、ここまで減らすというビジョンは示すべき。

〈担い手・捕獲努力〉

・夏から秋に出てきた個体を目いっぱい捕って被害が収まらない状況。捕獲個体は若いオスに偏っている。今後、捕り方をどうしていくかも必要な議論。

・無理な目標を立てても意味がない。どれぐらい捕獲できるのか考慮し水準を決めるべき。

・積極的捕獲はしてないので、捕獲数は伸びる余地はあると思うが地域差は大きいと思う。

・捕獲労力は非常にかかるので、予算措置をして捕獲に当たることが成否に関わってくる。

〈メスの捕獲〉

・メスの捕獲が個体数減少に有効だが、増えている状況において、メスを狙うべきなのか。
・あつれきを減らすのであれば、若いオスを捕獲することでよい思うが、増加率を抑えるためには、人里周辺のメスを捕る必要があると感じる。
・被害多発地域では、積極的にオスもメスも捕獲することが必要。山奥でメスを捕獲しないようにすべきだが、そこを設定するゆとりはないと思う。
人里出没個体だけを捕っても多分減らない。将来的に山奥のメスを捕るのをやめるとか、段階的なロードマップをつくるべき。
今は人為的環境の周辺で相当な捕獲をやっていく。あるゾーンでは排除していくという具体策をとにかく作っていくことが必要。

〈指標・モニタリング〉

・根拠をもって目標を決める難しさはあるが、現状を踏まえ、暫定的に捕獲目標を設定し、変化を見るのは重要なアプローチで、その前提として、変化が読み取れる指標が必要。
・捕獲に伴うその後の出没や被害を評価しなければならない。

〈ゾーン〉

・今の段階では、捕獲努力量は人里周辺に集中すべきと思う。
・狩猟管理は今のままで、市街地周辺での捕獲圧の強化に注力すべきなのかなと思う。

〈その他〉

・被害があり、相当な恐怖心があるので、増加力を止めるだけの捕獲では厳しいかも。
・問題個体を取り除き被害を減らすのは数が少ないときの話。個体数が増えれば問題個体も増える。増えている実態を危機感を持って捉える必要。
・検討会で捕獲目標を暫定的に設定し、それに基づき、どこまで減らすかというビジョンを共有する議論を進め、目標に向けた実施に当たっては、予算措置とモニタリングを徹底することが必ずセットでなければいけないということ。